

163.肝細胞癌に対する内科治療効果および有害事象に関する研究

研究の概要

この研究は、国立病院機構熊本医療センターで肝細胞癌に対する内科治療を受けた患者様の治療効果と有害事象（副作用）を解析することにより、患者様に病状に応じた最適な医療を提供することを目指すためのものです。

情報等の使用について、直接に説明して同意はいただきず、このお知らせをもって研究に関する事項を公開いたします。対象となる方におかれましては、研究の主旨・方法をご理解いただきますようお願い申し上げます。

この研究への参加を希望されない場合、あるいは、研究に関するご質問は下記の問い合わせ先へご連絡ください。

研究の目的と方法

当院では、2018年4月より早期肝細胞癌に対してマイクロ波焼灼療法による経皮的治療を開始しました。これまでのラジオ波焼灼療法に比べ、短時間で広い範囲で治療効果が得られることが判っています。一方、まだ偶発症に関しての十分な集積ができていません。

2018年3月より切除不能な進行肝細胞癌に対してレンビマ（レンバチニブ）カプセルによる内服治療、2019年6月よりサイラムザ（ラムシルマブ）による点滴治療がAFP 400mg/ml以上の切除不能な進行肝細胞癌に対して保険適応となり、さらに2020年9月よりテセントリク+アバスチン（アテゾリズマブ+ベバシズマブ）による点滴治療、11月にカボメティクス（カボザンチニブ）による内服治療が保険適応となりました。これらの治療は生存期間の延長や腫瘍の縮小効果において高い治療効果を示しています。一方、様々な副作用の発現が起こることも判っています。これらの治療を行った自施設での症例に対して臨床的解析を行い、治療効果と有害事象を明らかにすることを目的とします。

当院の電子カルテシステムから画像検査および検体検査（血液および尿検査）項目を抽出し、匿名化された状態でデータベースを構築し、各種解析を行います。

調査期間

2018年4月1日～2023年11月30日

問い合わせ先

国立病院機構熊本医療センター：電話番号096-353-6501 消化器内科

研究責任者：杉 和洋